

「でも今度は中々油断してゐまいから、甘く行くかどうか」

「手前がそいつを盗み出したら一萬弗だがどうだ」

「一萬弗」

「叱ッ、聲が高い、氣を付けろ」

ハリーは恐い顔してケンスビーを睨んであたりへ氣を配つた。

「親分、それは本當かい」

「俺が嘘を云つたためしがあるか」

ケンスビーは承諾した。即座にハリー親分は着手金として千弗を出した。何處から何う出すかハリー親分は毎時も大金をちやんと持つてゐた。その癖贅澤らしい贅澤はしないのだ、屋根裏の部屋に燻ぶつて鼻のやうな眼をしてゐた。そして稼業は波止場人足の親方で目當の上前を跳ねると賭博で食つてゐる。といふのは表面の事だが、然し彼の生活がそれ以上に出ないので彼を土地のものは怪しむ

ものは無かつたのだ、然しハリー親方も一つ恐いものがあつた。それは紐育からの通牒によつてハリーを地を分けても搜索しやうとする全国的に張られた警戒網だつた。だから彼は紐育ツ兒らしい言葉を決して使はず、この土地ツ子らしい訛の多い言葉で話したし、表面の稼業の用事以外はそう出歩かなかつた。

浪費者

ケンスビーはその晩、ハリー親分から受取つた着手金の内から三百弗を持つてキャバレー、フランセーへ出掛た事は無論である。暫く行かずに居ただけでみんなから非常な歓迎を受けた事は勿論だ。

「ケンス、どうして今まで來なかつたの」

夢にも忘れないアルマは彼の胸へ頬を押し付けて、碧い瞳で見上げられてケンスは感動で眼の中が潤つて來るのだ。

「ふむ、ちよつと故郷へ歸つて行つたんでねえ」

「どうして」

「何に、故郷の親爺が年寄りなもんで、俺を見たがつて、来い、来いと云ふもんだから」

「そうなの、でも感心ね」

アルマのこんな短い賞讃でも彼に取つては功勞章を貰ふよりもつと有難かつた。そしてその金のある間アルマのキャバレーに通つたのだ、アルマは花形で来る客は皆アルマに關心を持つてゐて、ちやほやしたがアルマは無骨で粗黙な餘り教養の無いやうなケンスビーであつたが、燃える様な彼の熱情と純真な性格に何時とも無しに引つけられて、ケンスビーが來ない日はアルマは何となく淋しく物足らなかつた。

ケンスビーはハリー親方との約束があるので晝職場で働きながら、絶えず注意

を怠らなかつた。しかし嚴重な事はとても嚴重以上で、手の下しやうが無かつた

「何とかしなければならぬ。餘り愚圖々々してゐるとハリー親分に濟まない」

とケンスビーは少しづつ焦り出した。そして種々な遂行手段を考へた。

「外から忍ぶ事は先づ不可能だ、内に忍んで仕事をしなければならぬ。それに
は……」

どうしたら好いのか、最善の方法は中々考へ及ばなかつた。

流石にケンスビーは考へ抜いた擧句ふと名案が浮んだ。

「宜し、これなら人に疑はれまい、唯だ再び工場へ潜り込むのが少し厄介だ」

ケンスビーはその名案を考へ出すと一層、工場内のすべての事物や特に技師室の内部に細心な注意を拂つて見遁さなかつた。

ジョンズ技師官が此間の盜難事件の責任者として依頼免職となつた後にパンカア技師が來た。この人は何事もきちんと規則的で實に注意深かつた。晝間晝間圖

によつて模型の容積比率の計算をしてゐるが誰にも見せなかつた。そして退廳時間になると一人で金庫の中へ藏ひ込んだ。五分の隙も無いのだ。ケンスビーはどんな秘術でこれを大膽にも再び盗み出そうとするか。

技 術 官 室

ある日蒼い顔してケンスビーは出勤した。

『どうしたケンス』

『昨夜から下痢してゐるんだ』

『では工廠の病院で診察して貰つたら好い』

仲間に言はれた、ケンスビーは工廠病院へ診察して貰ひに行つて薬局から薬を貰つて來た。

『休養した方が好いよ』

『先生、でも工場の方は今忙しいのです。それに精勵賞に關係しますから休み度くないのです』

『お前はどこの工場だ』

『先生、私は模型工場にゐるんです』

『例の問題の工場だな』

ケンスビーは苦笑して、

『そうです、容易に犯人が擧らないので職工たちは皆弱つてゐるんです』

『見當が付かぬかね』

若い醫者は興味を持つて尋ねたのだ。

『どうも、解らないんです。若しかすると、I、W、Wの連中の仕業ぢやないかと皆は睨んでるんです。各職場に潜行的にI、W、Wのカムラードが入つてゐますからね』

「うん。左様な政府や軍部に反感を持つてゐる奴らだから悪戯半分になつた仕事業かも知れんな」

「そうでせうな」

眞犯人がそんな事を平然と云へるのだから、全く事件は迷宮に入つてしまふのだ。日本ならば斯んな間抜けな事は有る筈が無い。

「成るべく氣を付けて餘り勞働しない事だ、職工長によく云つて置いたが好い」
親切な醫者は言つた。

ケンスビーはその日仕事最中に幾度も便所へ下腹を壓へながら馳け込んだ。そして何時も便所に入つて、出て来る時は蒼い顔してがっかりした様になつてゐた。終業時間が来て職工は歸り仕度をした。ケンスビーは皆と一緒に黙呼を受けた。そしてトラックに乗りかけたが、

「いけない、も一度、便所に行つて来る」

と逆戻りして職工長がまだ工場内にある處へ下腹を壓へて馴れ込んだ。今日一日幾回となく便所通ひをしながら勇敢に働いてゐたケンスビーだつたから職工長は、ケンスビーの恰好を見てにやりと笑つたが、そんな深い巧みのある事とは夢にも知らず、ケンスビーといふ男は感心な男だ。あんなにひどい下痢してゐても働いてゐる位にしか思はず、さつさと出て行つて仕舞つた。

ケンスビーは長時間便所の中で蹲まつてゐた。

重い扉が下された。その音響が彼に充分な、或は最も安全な機會を與えたといつていいのだ。

「しめたッ」

工場内に全く人が居ないと認めて重い扉を下ろし、窓々を閉鎖するのだつたから。

ケンスは工場内に喜ばしい封鎖をされたのであつた。

彼は猫のやうに先づ便所から出た。そして壁の鐵筋を這ひ上つて棟の鐵骨を涉つて屋根と屋根の狭まつた角を隅へ身を潜めた。どんなに嚴重な巡視兵でも其處に人が隠れてゐるとは思はない。それに彼等巡視兵は近頃、警戒心が緩んで來てゐた。

實を云ふとそれ程、彼は急激な下痢はして居なかつたのだ。

長時間彼はその梁の上に隠れて一時間毎に工場内を巡視する水兵達の大聲で談笑しながら、唯形式的に場内を一直線に通過するだけの緩慢な警衛振りを見てすつかり自信を得た。夜が明けた。始業迄に二時間あつた。警衛は朝になるとすつかり緩んだ。

鼠のやうに這ひ出したケンスビーは地面に下りると自分の擔當する仕事の場所へ忍んで行つて鍵を明けて抽出しから模型用の石材を取出してその中へ隠して置いた技師室の扉の鍵を持つて、立派に扉を明けた。そして注意深く元通に閉めて

金庫の前へ進んだ、そして毎日技師が朝の出勤と終業の時にする金庫を開閉する符號を合せる手の遣ひをすつかり覚えてゐて、靜かに其通りやつて見た。するとどうだろ、技術官が最も安全なところとして絶対に他人に侵入を許さない秘密の殿堂の扉がケンスビーの手で何のこだわりも無く明いたではないか。

「おゝ、明いたぞ」

ケンスビーは胸が喜びで顫へた。

新らしい設計圖は持ち出された。ケンスビーの手で。

そして彼は兼ての計畫通り技師室備え付けの寫真機でその設計圖を寫してからもとの様にすつかり藏つて、決して昨日終業後に人の入つた形跡の無いやうに扉がきちんと開ちられた。

朝になつてから仕事を敢行したケンスビーの機智と大膽によつて亦もケンスビーは甘く成功したのだ。

生かしては置けない

今度はそんな事があつたとは誰一人知る者はなかつた。

ケンスビーは直ぐハリ親分の處へ行つて大いに賞讃されて着手金は別として一萬弗貰つた。

「だが、今度は少し警戒しないと餘りキャバレー、フランセーで紙幣びらを切る
とばれるかも知れん」

と思つたものゝ、アルマの事を思へばこそその不敵な行爲だつた。彼は亦もアルマのもとへ通つたのだ。

ある夜キャバレー、フランセーへ風装はいゝが人相のよくない男、丁度それは賭博打ちの親分見たいな中年男が来て、シヤンペンを抜いた。それは變装したハリだつた。

「いやう、親分」

ハリは吃驚すると、ケンスビーは酔つ拂つて美しい金髪の十八九の女の肩を擁してゐるでは無いか。

「畜生め、こんな處で」

と内心非常に怒つたが流石ハリはそれを表に出さず、

「いよう、ケンスビーかい」

「好く来たね」

二人は其處で飲んだ。女達はハリがケンスビーのかなり親しい先輩だと思つてたらしかつた。

そんな事からハリも、むしろ時々キャバレーへ行つてケンスビーの態度をそれとなく監視する必要があつたので行くやうになつた。ケンスビーは其處で一番美しいアルマに逆せ上つて酔ふとふんだんに紙幣びらを切つてゐるのを見てハリ

「は困惑した。」

「あんな真似したらバレるに定つてゐる」

と思つた。

「女にのぼせるのは一番いかん、兎角女を餘り好く奴で成功した試はない」

だがケンスビーの様子では到底反省し相もなかつた沸騰點に達した戀だつた。

そして悪い事には相手のアルマもケンスビーを憎からず思つてゐる様子なのだ。

「いかん、いかん、彼奴ばかりでない、俺も危なくなる」

そう思ひながら其處では何氣なく酒を飲んで相當金を遣はねばならなかつた。

ハリーがケンスビーの態度が餘り露骨になつて不安を感じた通りに、犯人が何

時も擧らないでゐるので焦燥つてゐる捜査本部では、毎晩のやうにキャバレー、フランチーで全く身分不慮の大盡遊びをするケンスビーに當然のことで目が光つた。

ハリーが時々行つてゐる中にケンスビーのだゞら遊び振りに物陰から注意してゐる男があつた。

「こりや、もうケンスビーの破滅だ。だが俺迄こんな莫迦者の卷添えを食つては堪らないぞ」

ハリーは考へた。

「殺すより仕方がない。それも今の内だ」

とハリーは覺悟を決めた。

それは或る晩だつた。午前二時過ぎにキャバレー、フランチーを出てアパートへ歸つたケンスビーは翌朝起きなかつた。扉が何時迄も明かないのでアパートの番人の主婦が皆を呼んで鍵を捻ぢ明けて入つて見るとケンスビーは寢臺に踵ん反り返つて全身、血にまみれて何者かに殺されてゐた。

そしてハリーは屋根裏の住居といふより巢から何時の間にか姿を消してゐた。

ケンスビーの殺されたのも不思議だつた。當局では工廠の重要書類盗難事件の眞犯人はケンスビーに違ひない事が明瞭になつた。そしてその背後に彼を操つて居た人物のあつた事も推定出来た。それがハリー親分といふ奴らしいと判断したがこの賢明な推測はすべて正確に近いものだつたが當局は到々工廠の名譽のため又は犯人が殺されてしまつたので、世間には相變らず眞犯人は捕まらず五里霧中にゐる様に見せかけた。

そして背後の怪人物ハリーの身元と行衛を嚴探する方針に變へた。

こんな中にアルマはケンスビーの暗殺されたのを知つて心から泣いた。

「あんな、純ない、男をどうして殺したんだらう。餘り此處で遊んだので嫉妬されて殺されたのだらう。可哀そうなケンス」

アルマはケンスビーがそんな破廉耻漢とは夢にも知らなかつた。

そんな騒動を尻目にかけて、ハリーは紐育へ亦も潜行的に歸つて來たのだ。彼

はこれからどう暗中飛躍するか、不思議に悪魔的活動能力のある男である。

日本大新聞の重大事件

一九三〇年倫敦に於ける日英米佛伊の軍縮會議が開催された。各國海軍力の比率協定の重大會議であつた。日本は華盛頓會議當初より「他を襲はず自らを襲はれず」といふモットーで飽く迄革固たる平和的的信念で嚴正公平の明るい態度でこれを持してゐた。

日本全權若槻禮次郎氏、財部彪氏、と當時英國駐紮大使松平俊雄氏の外顧問安保清種氏以下十數名が會議に先立つて英京倫敦へ到着した時、停車場には英國側歓迎委員數名に過ぎなかつたと云はれる。それに引換えて米國全權の倫敦入りには英國政府の歓迎は首相マクドナルドを初め要路の大官が悉く停車場に出迎えて米國全權の遠路の勞を犒らつたと云ふ事だ。

會議の進行につれて各國代表の自國を有利に導かんとしての論究で緊張した場面續出した。英米は露骨に提携してゐる事を他の參加國代表に見せびらかした。米の主張には英はいつでも賛意を表した。伊は英米の歡心を買ふやうな態度で曖昧模糊としてゐた。

日本と佛國とは相互の主張の上に共鳴を感じてゐた。特に補助艦、潜水艦制限に對して日佛共歩調を一にせずにはゐられないのだつた。

日本の潜水艦の威力は世界第一である事は各國が等しく認めるところだ。米國にして見れば太平洋沿岸の日米二大強國が對峙してゐて、日本に強大な潜水艦を保有される事は非常な恐怖であつたのだ。

『日本に優秀な海軍力を保力される事は吾がアメリカに取つて不利である』
米國の専門家は始終それを念頭に置いて、何とかして日本海軍力に制肘を加えやうとしてゐた。

倫敦會議でも米國は他國の軍備はどうでもよかつたのである。たゞ日本だけが目の敵であつた。

日本の態度は公明であるだけに強硬であつた。日本國內の輿論がこれを支持して嚴として動かず、米國はだぢろぎ氣味で、その日本の舉國一致の美はしい日本精神を半ば羨望と感歎の目で眺めてゐたのだ。

斯うした時米本國華盛頓の國務省の一室では重大な對日本の策謀が密かに行はれてゐたのだ。

それは何か。

後日、東京の新聞街に恐慌と周章狼狽を捲き起して日本の大新聞各社の某重大事件となる。

國務省内の密議

「日本全權の主張が強硬で、飽く迄も最初の要求通り譲らんで弱るんだ。若槻全權は頭腦の明敏な、日本に取つては信頼すべき立派な全權だが、米國は米國の主張を曲げられぬ。日本にあの海軍力を保有さして置けんからな」

「左様だ、それに日本は政府の對外交渉の場合には國民は必ずこれを支持する。國が狭いだけに輿論が徹底するんだから、直ぐ舉國一致といふ事になる。これが非常に牢固たるものだ」

「それだよ、今度のロンドン會議で日本代表の腰の強いのは彼等の本國の輿論が絶對政府支持だといふ事を知つてゐるもんで、すつかり氣を好くして飽く迄も主張貫徹させやうと云ふんだ。それに日本海軍の幹部連が何處までも強硬意見なのだから、うつかりすると日米の比率問題でまた今度の會議も決裂するかも知れないんだ」

「最善の方法は無いものかね」

「全然無いことも無いが、それには餘程努力を要するのだ」

「それはどういふ事かね」

「日本の輿論、國民の呼聲を緩和するんだがね」

「それが出来るかな、日本人は中々他國の言葉に耳を傾けんよ」

「左様だ、それで至難な業だと思つてゐるのだ」

「それは一體、どういふ方法だね」

「どうだらう、日本の新聞を買収したら」

「うむ、成る程ね」

「出来るだらうか」

「さア、果して日本の新聞が此方から買収しやうとして引懸るか知ら、それは驢馬が針の穴を通るより至難かも知れんね」

「金でどうだらう」

「日本人はあれで金には昔から恬淡な人種だからね、金よりも名譽を彼等は望むといふ性質だからね」

「誰か適當な、日本に信用されてゐるアメリカ人を遣つて口説き落せないものか知らん」

「それは兎に角至難な仕事だ」

「僕は六百萬弗の機密費を出して日本の大新聞社へバラ撒いたら、大抵今迄の硬論を聊か緩和出来ると思ふのだ。そして國民は今迄新聞の論調と一致してゐたものだから、新聞が自然的に論調を下降さして行つたのに氣が付かず彼等もそれに追従して行かせるといふ方法を取れば、之で案外成功するかも知れん」

「成る程、左様かも知れんが、新聞が甘く、それを承諾するかな」

「それは新聞社長とその幹部個人に金貨を積んで眩惑させやうといふのだが」

「彼等は金より正義が欲しいと云ふだろう、それは不成功に終るやうだな」

「やつて見ぬ中は解らぬ」

「一體日本にどれだけ新聞があるのだ」

「大新聞といはれるのは、東京と大阪に新聞社がある、朝日、大毎、これは日本の兩大新聞といふのだが、東京と大阪にこの兩社が對抗してゐる外、時事、報知國民、讀賣、都、毎夕などといふのが東京の代表的新聞なのだ」

「それらの新聞を全部軟化さすのは並大抵の努力ぢやあるまい」

「日本人は昔から自尊心が高いから其處をうまく利用して此方から下手に出て頼み込むのだ、すると仁侠な氣風を愛する彼等はアメリカが辭を低うして懇願したといふので喜んで承諾する氣がするのだがね」

「そう容易に行くかね」

「大抵大丈夫だ」

「でも、その密使を派遣するにも適當な人物が居るかね」

「日本國內に、特に新聞記者に好感を持たれてゐた、アメリカ人を派遣するより外にないが」

「學者か、牧師か」

「いや、且つて東京駐紮の外交官で日本人に最も好かれてゐた人物をやらうと思ふ」

「そうした心當りがあるかね」

「無い事もない、そして出来れば今日、明日にでも派遣したいのだ。ロンドン會議終了前に日本輿論を緩和し、新聞に日本海軍の硬論を漸進的に攻撃させるのだ」

「成る程、それが出来れば大成功だ」

「出来る自信してゐる。今、その派遣さすべき人物を撰擇してゐるのだ」

「それが成功すればアメリカの恐日病も全快するだろう。もう十一時だ、省内課

長會議に出席するから之で失禮する」

二人は立ち上つて握手してから二人共、この室を出て行つた。

元より嚴重なアメリカ國務省内の秘密會議室での二人對座の密談だ、彼等以外に全く聞くものがないと思つてゐた。

壁に耳あり

彼等二人が扉の外へ出た。その足音が廊下の遠くへ消えると、どうだろう、正面のワシントンの大きな油繪の肖像の掛つてゐる大きな壁暖爐の中からひらりと室内に出て來た男がつかつかと窓際へ行つて外を注意深く眺めてから窓を明けるとぼつと地面へ飛び下りた。

そして芝生の上に置いてあつた煙突掃除のブラシを肩にして、さつさと構内を横切つて國務省通用門を出て行つた。

煙突掃除夫が國務省を出て行く事は何の不思議もない事だつた。守衛はちらとその油煙で眞黒になつた男の姿を見たが直ぐ門外を通る美しい令嬢風の二人の娘の方へ目を注いだ。

この煙突掃除夫は何者だろう。

X氏の股胯の部下ハリ親分が時々煙突掃除夫になる事は知る人ぞ知る。何んのために彼が煙突掃除夫になつて國務省へ入り込んだか。

「あの二人が饒舌りやがつた事が本當に實行されると日本は困るぞ、彼奴らの言つた事を逆に利用してやれ、然し重大な機密を聞いたもんだ、今日の煙突掃除はボックスの中からダイヤモンドを拾つたやうなもんだ」と彼が吐いた。

彼は依然としてX氏のため秘密な役目をしてゐるのだつた。

安い紙巻煙草をぶかぶか吸ひながらブラシヲ肩にかけて何處から見ても煙突掃

除のハリ親分で何食はぬ顔して、

「お得意様が多いと忙しいよ」

ドーデン婆さんの居酒屋でコニヤック一杯かぶるときめると銀貨を氣前よく一枚放り出して東一丁目の角を曲つて行くハリ親方の姿を見て

「ハリ親方位、金拂の綺麗な人はないねえ」

ドーデン婆さん頭を揺つてゐる。

ハリ親分の住みであるアパートは二階の右側の角の隣りだつた。國務省の煙突掃除を仕上ての歸り途にドーデン婆さんのところで一杯ひつけて来て一杯上戸のいゝ機嫌で歸つて来たハリ親方、右角の扉をこつこつとノックして、

「おーい、日本の先生、お出掛けかい」と聲を懸けた。

「居るよ、ハリ親方かい」

「ほら、今日は珍らしく内にゐるね、今日は國務省の仕事で儲けて来たよ、どうだいこれからドーデン婆さんのところで飲もう」

「景氣のいい話だね、まあ入つたが好い」

「ちや、ちよつとお邪魔するかね」

「ハリー親方はその仲のいゝ隣人の室へ入つた。」

「これは上機嫌だね」

古びた洋服にカラなしのワイシャツを着た日本人、新聞を片手にしてハリーを迎えた。それはX氏だ、このアパートではX氏はジョン、と名乗つて、ハリー親分なんかの賭博仲間であつたといふ仕事の無い一種の浮浪人で済してゐた。このアパートに住む連中も誰もそれを疑はなかつた。

秘書課の女タイピスト

ワシントン政府とロンドン會議に出席してゐる米國全權との間に取交はされる電請電訓を傍受して米國の暗號を解讀してゐたのは英國の牒報局が最も成功してゐた佛國もそれをやつてゐた。然し電報でない外交書信、それは機密を要するものである事は勿論だ、その甚だ重要性を帯びた外交文書の絶對秘密な言葉を、その通り一字一句間違なしにその受取人より早く知つてゐたものにX氏がゐた。

X氏はどうしてそれをしたか。

それは度々大きな手柄を現はして、そのかはり非常な危険にも遭遇したケネスといふハリー親分の秘藏娘がゐたが、彼女の活躍が餘り著しくて米國官憲の眼が光り出したので、彼女は表面から足を洗つて、マダム、サルバイアと稱して金持の未亡人といふ事になつて紐育郊外の某地に氣樂に暮してゐる。

その生活費は年額二萬弗づゝX氏の手許から支拂はれてゐた。

このケネス事、マダム、サルバイアといふ古風の名の偽せ未亡人の妹のマルダ

リットといふ二十になるちよいと女學生風な娘を、マダム、サルバイアが教育したのだ。

何の教育かと云ふと、それは女間諜學だつた。實の妹、實の姉だからこの教育が好成績で進捗した。

マルヂリットはタイピストになつた。そして實に幸運にも彼女は國務省に雇はれたのだ。それはX氏一味の裏面からの運動が功を奏したのだが、マルヂリットが國務省に入つてからもう二年になる。探偵學を修業した程の娘だから頭腦は中々、明敏だし、きび／＼してゐるから上役を信用された。美しい顔をしてゐるか、助平なアメリカ人の事だから殊にそうだつたかも知れない。

そして彼女は秘書課のタイピストになつてゐた。

『彼女は堅實で、秘密を外へ洩らすやうな娘ぢやない』

と云はれて推薦されたのだが、スパイを堅實だと云ふのならこの世に堅實でな

いものがあるうか。

華盛頓政府の機密が折々外部へ洩れてゐた。然しいくら嚴重にしてゐても洩れるのだ。その事に付いて斯ういふ話がある。歐羅巴のある大國で、内閣の諸大臣ばかりが絶對外部に漏洩する事のない大ホールの中央の圓卓に頭を集めて聲をひそめて重要な問題を討議した。これこそ外部には知れる氣づかひが無いと信じてゐたら、その習日の新聞に、その内部の状況を諸大臣の言葉とがちやんと記事になつて掲載されてゐたといふ。

それ位だから多少の秘密漏洩は餘り重大性がない限り、うやむやにして置くのだ。

米國國務省もそんな些細な機密の漏洩は手を付けず。仕方ないと放任して置いた。この漏洩の犯人はタイピストのマルヂリットであつた。が誰も彼女とは思はなかつた。

それに秘書のトミー、ライゼルといふ若い官吏が、マルゲリットに大分厚意を寄せて、それが戀らしいものだつたから、マルゲリットは甘くそれを利用しては何かの話の序でに、機密事項に觸れてそれを聞き出してゐたのだ。

それを姉のマダム、サルバイアに話し、マダム、サルバイアからハリーに話し、ハリーの口から本尊のX氏の耳に入つてゐた。

聰明なマルゲリットは、姉のマダム、サルバイアの何もしないで奢侈な生活は誰かの手から出るものである事は知つてゐた。

『あのハリー親方といふ人が怪しい』

然しその背後にX氏といふ日本人の居る事は全然氣が付かなかつた。

姉にそれを尋ねた時

『それは英國人だよ』

と答へたからマルゲリットは、彼女自身が英國のスパイをしてゐると思ひ込ん

でゐた。

彼女の任務

彼女の女の第一に成すべき仕事は重要文書、それは國務省が各關係筋に發送する書信をタイプライターで叩く時、敷いてあるカーボン紙を一回毎に取換えて屑籠へ入れて置く事だつた。

そのカーボン紙を明るみへ透かして見るとちやんと文面が現はれるのだ。これが國務省の掃除番の爺の手からハリー親方の手に廻はされ、それにはその爺の寢酒の代ぐらゐの僅少な金を拂へばよかつた。

で國務省の書信は彼女がタイプしたもののだけはX氏の手の中に入つて、現在國務省が如何なる政策を取つてゐるかX氏は室内を一步出ずして知悉してゐたのである。

ある日の事、閣議が終つて、會議室から出て来た大官連の鞆持ち役の若手の秘書官、陸軍のハムズンと國務のグラネルが大臣達が休憩室で柔い世間話に興じてゐる暇に彼等二人は國務省の祕書課室へやつて来て、人の居ない卓へ腰を下ろして今日の閣議の議題に付いて青年らしい批評を加えてゐた。室には老人の屬官が眼鏡越しに書類を調べてゐたし若い淑ましやかなタイプビストが熱心にタイプを打つてゐた。

「ねえ、ハムズン君、オヤチ(大臣)連は勇猛心がなくていけないよ」

「右願左願で、果斷がなくて、あれぢや到底ものにはならんぞ」

「一つは恐日病に罹つてゐるんだ、其處へ行くと日本の軍部は強いな、アメリカと戦争したがつて着々軍備を整えて毎時も緊張してゐるといふからな」

「それにアメリカは日本の潜水艦を恐ろしいのだよ、歐州戦争で獨逸のサブマリオンが地球上の海洋を傍若無人に荒し廻つたのが身に泌みてゐるからね、日本が戦

つて大平洋上を我が物顔に跳躑されるとアメリカの軍艦は危険極まる位置に暴露されるからね」

「アメリカは、その對策に苦しんでゐるんだ、そうなるとするとアメリカは空軍で日本を脅威しなければならん」

「然し飛行機の大平洋横斷は不可能に近いね」

「何に飛行母艦に積載した飛行機を日本近海に入つてから、飛翔させれば好いんだ」

「でも君、飛行母艦が日本領海にそう易々と入れるかい、その前に日本潜水艦の魚雷で、ドカン、とやられたらお終ひだぜ」

「君、飛行母艦には驅逐艦が掩護して行くぢやないか」

「ハハハ、日本だつてそれ位の事は知つての上の戦略があるよ、あの世界第一を誇つてゐる潜水艦だからね、だから今度アメリカ陸軍では大平洋沿岸各地に日本

の襲来に備えるため岩壁を設けて隠見砲臺を仕掛ける事にしたのだ、明日の閣議に諮つて決定を見るだろう」

「へえ、大事業だね」

「うむ、最新科學の粹を集めたものだ二萬七八十碼の着弾距離をもつて砲が五六十門据付けるんだが、閣議で決定すれば早々着手する事となつてゐるんだ」

「でも大平洋沿岸には日本人が大勢居るから危険だね」

「それで、その工事に使用する人間は絶対にアメリカ人である事だ。そして何萬人といふ人員を成るべく大平洋沿岸でない各地から募集する手筈だ」

タイピストは此時熱心にタイプを打ちながら唇をキツト結んで耳を澄ましてゐたとはこの二人の若い秘書は氣が付かなかつた。

密書来る

紐育にゐるハリイのもとへ華盛頓から無名の女文字の手紙が来た。ハリイは、にやにやしたからその手紙を封を切らずにX氏の手へ渡した。

「ハリイの戀人からだね」

「へえ、可愛い娘ですよ、俺の云ふ事は何でも聞くのですからね」

二人は顔を見合せてにやりと笑つた。封を切つてX氏は文面を見てゐたが次第に顔を緊張させた。

「ほらう」

X氏は低い感投詞を發した。

「何ですかい」

ハリイは横から手紙を覗き込んだ。

X氏は読み終るとそれをハリイに渡した。

「ハリイ、忙しくなるぜ」

X氏は眉宇に深い皺を寄せて窓を覗めてゐた。

「えらい事をあつぱじめましたね、人が要りますな」

「うん、尠く共十人位は」

「十人位で足りるでせうか」

とハリーは百人でも俺が引受けやうといふ顔をした。X氏はその顔いろで察したやうに

「無駄な人間が百人あつても千人あつてもいかんよ、技師級の男が二三人あれば後は土工の中に十人ぐらゐれば好い」

「成る程、でも技師級の男二三人は至難でせう。技師は陸軍技術官が任命されるでせうな」

「左様だ、大急ぎで陸軍技術官の素行を調べて見やう」

「又、女が要りますな」

「その通りだ」

こんな話があつて後、X氏は秘密書庫になつてゐる床下のブラック、ホールから、それはハリーが一生懸命に二た月もかゝつて工事したものであつた。平常はそれに蓋をして、古いポロポロの絨氈を敷いてあるから全く誰にも気が付かなかつた。X氏はその秘密の書庫から、厚いアメリカ陸軍省の職員録と、華盛頓の有名な私立探偵事務所から秘密に發行された一種の紳士録、X氏はそれを手に入るのに僅か百弗の書籍に五千弗拂つてゐた。その二冊を取出して、陸軍省の職員録に依つて技術官の人員と姓名と在任年数と俸給と住所、つまり職員録に掲載されずすべてを詳しく調べ上げてから、秘密紳士録によつて彼等の家庭や親戚關係過去の経歴、素行を洗ひ上げたのである。

ハリーはX氏の室へ来てゐた。

「ねえ、先生、人夫募集を初めた事を聞いて来ましたかね」

「うん」

「俺ア四、五人引張ッて應募しやうと考へてゐますが」

「私もそう考へてゐた」

「左様ですかい。だが国籍や何か矢笠しく調べるといふですかね」

「宜しい戸籍の方は私がいゝやうにしてやろう」

「お願ひします」

それから一週間経つとハリーはコロラド生れの百姓で名をハベリー、トムソンと如何にも百姓らしい姓名に變化して、服装も野暮つたいホーム、スパンの厚つぽい型の極めて古い洋服を着て、紐育の口入業者の家を訪ねた。見れば無骨で百姓らしい男であるから、口入業者は直ぐ快諾した。

ワシントン陸軍省で今度大平洋沿岸の防備工事の人夫名簿に、コロラド生れのハベリー、トムソンの名がちやんと登録され、彼の戸籍謄本と、寫眞が貼付されてゐた。その傍の備考欄に恐らく紐育口入業者が云つたものだらう。無類の正直者、過去十二年間紐育にて建築工事の労働者なりしも目下失職せるものなり。

と書いてあつた。

まんまとハリー親分、ハベリー、トムソンといふ野暮臭い名前で陸軍省直屬の人夫になつたのだ。

ハリー親分はコロラド生れのハベリー、トムソンに成り済まして、大勢の人夫たちと大平洋沿岸のある田舎へ送られた。

と共に多くの材料が毎日山のやうに貨車で運搬されて急造の材料倉庫に積み入れられた。陸軍の監視兵が目を光らしてゐた。

スパイ發覺

それはまだ工事がほんの端緒に付いたばかりでハリーのトムソンの屬してゐる組は斷崖の開鑿工事をせつせとやつてゐた。

ダイナマイトを仕込んで盤岩を炸裂させてゐた。ハリーのトムソンは年配であり、中々仕事の方も明るいといふので組頭のベン親方はトムソンを引立て、組中の人夫小頭格の位置を與えた。

それはある晩だつた。ベン親分にトムソンは呼ばれてベン親方の小屋へ行つた。ベン親方はウキスキーを飲んでゐたがトムソンが行くと、一杯トムソンにさして『よく来た、ちよつと手前に聞きてえ事があるんだ』と鋭い目でトムソンを見た。

『何んですかい、聞きてえつて云ひなさるのは』

ハリーは、ちらと不安の影がさした。

『うん、俺は面倒な事は嫌えだから、さつくばらんに云ふが、手前、何か俺に隠してやしねえか』

『何を、ですかい、はてお前さんに隠してゐる様な事は無えつもりだが』

『うむ、一應はそう云はずにや、居られめえ、がトムソン、もう隠し立てしたつて無駄だぜ』

『へえ？』

『トムソンぢや無え、ハリー、手前も見かけによらねえ太え野郎だな』

ベン親方は立上つてズボンのポケットから頑丈な短銃を出すとハリーの胸のところに迫つて、ちつと顔を睨んだ。

すべてはバレたらしい。

トムソンの假面が剝がされて本名のハリーを呼ばれるのではもういけない。

ハリーは逃げる隙を探したが何時の間にかハリーの背後にベンの腹心の配下が
二三人、各、ピストル片手にして憎々しげにハリーを睨んでゐるのだ。

『もう萬事休す。こんな時があらうとはこの仕事をした最初から考へてゐたんだ
X先生にも云はれて覺悟は付いてゐる。斯うした時、日本人は唯だ、死あるのみ
としか考へない。助かる事なんか毛の先程も思はんといふ事をX先生から聞いて
ゐる。俺もこれがこの仕事の年貢の納め時だ、潔ぎよく死んでやれ』
と胸の中で呟いてゐた。

ちよつと沈黙が続いた。

『やい、ハリー、貴様のやうな奴はアメリカの爲めに生かして置けねえ、明日陸
軍へ引渡す前に俺の手で殺してやる。有難く思へ。陸軍へ引張つて行かれりや拷
問ものだぞ』

ベン親方はこう云ふとハリーの胸ぐらを掴まえて憎らし相に揺ぶつた。

俺の父は日本人だ

『ベン親方、俺がハリーだと云ふ事はどうして解つたんですえ』

ハリーの聲は落着いたものであつた。それは冷たく云はゞ死を決したもののみに
見える沈着さであつた。

『手前、それを聞いてどうするんだ』

ベン親方の聲はすこし優しくなつた。

『死んで行く前に聞いて置きたかつたからさ』

『うむ、さうか、天國への土産に聞きてえといふのか、然し手前のやうな奴は天
國へは行けねえ、地獄へ墜ちる極悪人だ、悪魔の弟子と云ふなア、手前の事だ、
手前は手前の悪事を知つてゐるのか』

『そりや、知つてもゐるし、好い事ではねえと思つてもゐるよ』

「どうしてそんなら、賣國奴になつたんだ」

「それには種々、深い事情があるんだ。ベン親方、聞いてお呉んなさいと云ひてえが俺ア、口が曲つてもその事は云へねえんだ。唯、俺がアメリカの海軍に深い恨みがあつて遂にこうしたことになつたんだ」

ベン親方はビストル片手に、左手を腰にして、ちつと聞いてゐた。

「何が何でも手前のした事は人間のする事ぢやねえ、手前日本人の指金で淺ましい賣國奴になりやがつたんだらう」

「ベン親方、何とも云はねえ、殺して呉んなせい」

「死に急ぎしなくても今に殺してやる、やい手前たちはこの部屋から出てゐろ配下の若者を引下がらせるとベン親方は、

「あゝ、ハリー、手前、そんなに生命が惜しくねえのか」と聲を落して云つた。

「親方、命と名譽が惜しくちやこんな仕業になるものか」

「うむ」

「俺は最初から生命は投げ出してかゝつてゐたんだ」

「それはそうだらう」

「今、親方の手にかゝつて死ぬ事ア、ちつとも名殘惜しくはねえ、今迄でとなく死の谷の斷崖まで追ひ詰められたか知れやしねえんだ」

「左様か」

「今迄、生きて來たのが不思議な位さ、だが折角、此處へ乗り込んで何の獲物も掴まねえ中に死ぬのが、どうやら面白くねえが、これも仕方が無え」

「ハリー、俺は手前を殺したくなくなつた。生かしてやり度い、が到底、手前や逃れる事は出来めえ、監視が嚴重だ」

「いや、俺はもう逃げやうたア云はねえよ、親方のビストルでこの心臟をドンと

やつてお呉んなせいでよ、お願いだ」

「うむ、度胸のいい奴だな、殺すにや惜しい男だが、ハリー、手前、寝返りをうつきはねえか」

「えッ」

「手前を今迄使つてゐた日本人だか何處の國だか知らねえが、そのスバイ野郎に寝返りを打つてアメリカのスバイになつて、其奴の國の情報を探つて呉れねえかそしたら俺は手前の命は保証してやる」

ハリーは黙つて首をうな垂れて腕組をして身動きもしなかつた。ベン親方は空の杯にウキスキーを注いで呷つてゐる。

「出来ねえか、手前の量見一つで生命が助かるとも死ぬとも定まるんだ、ゆつくり返事が待つてゐられねえんだ、ハリー、早く返事して呉れ」

ベン親方はハリーの肩へ手を懸けた。

「親方、笑つて下さるな、俺は死にてえ方が勝ちだ」

「何故だ」

「俺は恩義のある人に叛く氣はねえんだ」

「手前の國を賣つてもか」

「アメリカは俺にバン一片食はして呉れなかつたが、俺の恩人は俺の生命を救つて呉れたのだ。その恩が有難てえんだ」

「うむ、左様か、何共仕方がねえな、ハリー、俺は一體、何に見える」

「お前さんはベン親方ぢやねえか」

ベン親方は唇を横に曲げて微笑を浮べたが、

「有難てえ、目から鼻に抜ける利口ものスバイの目からでも俺が唯の夫婦頭に見えるんなら、俺の本性は永久に解りつこねえだろう、おい、ハリー、俺の面、何處か變つてやしねえか」

とハリーの顔へペン親方は近々と呼吸の觸れる程、顔を寄せて來た。

「お前さんの顔、誰だとも違つて居ねえが」

とハリーは不思議そうに眺めてゐた。とペン親方、急にハリーの手を鷲掴みにして、

「おい、ハリー、俺ア、日米混血兒で、俺の生れた處は日本のヨコハマだ」

「何に、お前さん混血兒かい」

「そらだ、日本人の血が俺に流れてゐるんだ、俺の親父は日本の有名な銀行家なんだ」

と息を切つて云つたペン親方の顔には興奮で燃えてゐた。

悲しき回想

紐育の横濱正金銀行の支店詰の一店員、タケヲ、コムラ（小村武夫）が彼の父

であると云ふのだ。

彼の優しい内氣な母はテレザ、バイヨが娘盛りの十九に、タケヲ、コムラと結婚したのだ。テレザの家に間借りをしてゐた青年銀行家、それは目色毛色の變つた日本人ではあつたが互に若い者同志の事で戀におちたのであつた。

タケヲ、コムラは日本人としては脊の高い、白哲隆鼻の美丈夫で黒漆の髪を綺麗に分けて、體に合つた洋服をきちんと着てゐるところは東洋の貴公子と云ひたし程であつた。

で戀はむしろテレザの方から燃えて行つたのだ。金髪碧眼の愛らしいアメリカ娘の素振りを憎からず、遂に二人は木蔭や池の畔で戀を囁き、二人のために鳥が囁り、花が咲く楽しい日が續いた。

だがその楽しい二人の戀愛時代に小村は紐育詰三年の任期が來て横濱へ轉勤になつた。その辭令をテレザの前へ差出して小村は、

「テレザ、僕は日本に歸らねばならぬ」

「お、どうして」

テレザは胸に兩手を合せて、戀人の顔を見上げた。

「横濱轉勤の辭令を受取つたのだ。この日本文字はそれだ」

「タケオ、どうしませう、妾がどうなります」

「僕はお前と別れる事は出来ぬ、然し日本へ歸らなくてはならない。お前に好い智慧はないか」

「妾しより、貴方に智慧があるでせう、二人が一生決して離れない工夫をして下さいな」

「それには二人が結婚するばかりだ、だがお前のパパやママがそれを許して呉れるだろうか、異邦人の僕に兩親の寵愛の子を呉れるか知ら、そして僕は日本へ歸らなければならぬ人間だ」

「でも、妾、パパやママに話して見ますわ、パパもママも貴方を本當に信用してゐるのです。ですから妾が貴方と親密に交際しても快よく許して呉れるのです」

「左様か、では僕からも願つて見やう、テレザお前は日本へ僕と一緒に行くつて呉れるね」

「貴方の行くところなら何處まででも行きます」

テレザは嫺やかな體を小村の胸の中へ崩れるやうに靠れかけた。

ニッポン、ヨコハマ

そして彼女は小村と結婚した。二人が勇んで紐育を立つたのはそれから一週間ばかり後であつた。

密月旅行のつもりで長途の旅行も二人であると楽しい嬉しいものであつた。二人が日本へ着くと固い障害物が待つてゐた。それはタケオ自身は以前から

そうした不安を持つてゐたのだが。

武夫の父は中國の大藩の家老を勤めた人であつた。頑固一天張の父は金髪の美女を連れて歸朝した武夫を一瞥すると、何にも言はず勘當して仕舞つたのだ。それから親戚會議が開かれ善後策を講じ、幾度か武夫にテレザを離縁してアメリカに歸す事を厳しく要求した。武夫が歸朝する前に話だけを取定めてあつた同藩の矢張り家老で今は時めく大藏省勅任參事官をしてゐる權藤綾太郎の愛娘を餌にして攻め立たたのであつたが武夫は頑として却ぞけた。

「では貴様はもう小村一門から一切の關係を切るぞ」

叔父の大三郎は頭から湯氣を立て、怒鳴つた。テレザは言葉は解らなかつたが其の場の様子で氣遣つてハラハラしてゐた。

「宜敷いです。どうぞ御自由に」

「うむ、この莫迦もの奴が、紅毛碧眼の女にうつゝを抜かして由緒ある小村一門

の血統を汚す奴だ。そんな者は小村家の人間ではない、歸つて貴様の父にその事を云つて今後は貴様と絶縁ぢや」

「どうぞ」

「武夫、最後に云ふて置く、貴様は小村一門と絶縁した曉は將來、貴様の出世が難しいんだぞ、それを解つてゐるか」

「私は自分の出世のために人間らしい心を忘れたくありません」

「よし、それを忘れるな」

叔父はかんかんになつて立上つた。

そして武夫は最愛の妻テレザと共に一門から見離されてしまつたのだ。

叔父はそれを武夫の父、琢磨に報告した時に話の序でに斯う云つた。

「その西洋人の女は、淑やかな女子だつた。あれなら武夫も幸福ぢやろう」
叔父はテレザの氣質を認めたのであつた。

そして一年経つとテレザはベンを生んだのであつた。若いパパとママは二人の愛の結晶であるベンを寶石のやうに愛した。

勉二といふ日本名前をベンと若い両親は呼んだ。だがベンの三歳の時、若い父のタケオは急性肺炎で死んだ。テレザとベンの處置で種々善後策が講じられたがテレザは遂にベンを連れてタケオの遺産として五千弗の金を貰つて故郷の紐育へ歸つたのだ。

ハリーの終焉

「俺はそうした人間なのだ」

ベン親方はそう言つて暗然とした。

「俺はお前を殺したくねえのは相した人間で俺の體の半分は日本人なのだ。然し國籍は歴記としたアメリカ人だ、一體俺はどうしたら好いのか」

とベン親方は頭を抱えて卓の上へ突ツ伏した。

「ベン親方、よく解りました。だが俺ア、潔よくお前さんの手で死なう、どうせお前さんの手で殺されなくつたつて、兵隊の監視が厳しい中を無事に逃げ終せられねえんだから」

「まあ、待て、俺に工夫がある」

とベン親方はハリーを繩で固く縛つて置いて、

「どうだ、ハリー、こうして、これをナイフで繩が切れるか」

「造作のねえ事つてさア」

「よし、そんなら、やれ、運を天に任せて一度は逃げて見ろ」

「それ程迄に云つて呉れるなら俺ア、も一度考へ直そう」

「俺が手前を縛つて置いて、そして、それを手前がナイフで切つて逃げ出した事にしろ」

ナイフをハリーの手に持たせて次の暗い室へ押しやつてベン親分は戶外へ出て行つた。

「それ程に俺を逃して呉れるなら、逃げて見やう」

ナイフは手にある。繩を切る位の事はわけは無かつた。

體が自由になると小屋を飛び出した。其儘、山を縦断して次の停車場から紐育へ逃亡する事を突嗟に考へた。

入夫の寝泊りする小屋が、ずつと立ち並んでゐる間を夜の闇を幸ひに身を潜ましては飛鳥のやうに家の蔭から蔭へ飛んでやがて小屋の集團から離れて立木の疎らな草叢へ獵犬に追はれた兎のやうに身を隠した。

やがて立ち上ると、背後からぐつと襟首を掴まれてしまつた。

大勢の足音と叫び聲を遠くで聞いたやうな氣がして、

「もう、天運に見放なされた。逃れられない、然し、むざくと死んで堪るか」

と隠袋に日夜離さず入れて置いたピストルを右手にしつかり握ると背後へ向つて、一發。

「アツ」

聲がしたと思ふと、掴まれた手がゆるんでハリーは體が軽くなつた。

「逃げ出せ」

と足に任せて前面へ駆け出したが背後から追跡者の數が増して

「止め、止め」

と叫びながら追ふて来るがハリーの足には敵はなかつた。此方は命がけた。

が時々、脅威の銃弾がバン、バンと響いて、ハリーの周圍に弾が落ちた。山

道は傾斜が急になつて来た。ハリーの足は兎もすれば踵き勝ちであつた。

ふと前方の山を見ると、

「アツ、いけねえ」

監視兵が一行に並んでハリーの昇つて来るのを待つてゐる姿が黒く夜空に浮んで見えてゐるではないか。

ハリーは到々其處で捕縛されて工事場内の臨時陸軍衛戍監獄へ入れられた。ハリーは一切口を緘して談らなかつたし、斷食して食事は採らなかつた。

「ハリー、貴様が一切を白状したら助けてやるのだ。誰に頼まれたか、それを云へ」

「ハリーは恐い目をして、若い將校の顔を睨んで肩を聳かした。

「貴様が云はなくても解つてるぞ、貴様を賣國奴の汚名を着せたのは日本の陸軍將校だろう」

ハリーは幽かに微笑した。その微笑は輕侮の表情が現はれてゐた。

「ハリー、貴様は殺しただけでは足らぬ奴だ、白状しなければ拷問にかけるからそれでも好いか」

「うるせいやいッ、拷問にかけやうとどうしやうと猫や犬見てえに悲鳴を上げる人間ぢや無え、勝手に料理しやがれ」

彼ハリーは遂に銃殺に處せられる事になつた。

廣場に引出されて柱に兩手を縛られて、目隠しはされなかつた。一個小隊の兵から一齊に銃口を向けられて、指揮官の號令一下、激しい銃聲と白煙。

こゝに一種氣概のある、恩に酬ゆるために國を賣つたアメリカ人、ハリー、グランドは死んだ。種々の重大な謎を残して。

ベン親方は遠くから、その銃殺の様を望んでゐたがハリーが倒れると彼は空を仰いで深く黙禱した。

それから數ヶ月経つた。リバーブル行の汽船に乗つた日本紳士、暮れて行く紐育市街を上甲板で感慨深か相に見守つてゐた。

やがて英國から印度洋を越えて神戸へ十何年振りで歸朝した。

今日尙、東京の某所に重要な地位を占めてゐる半白の頭髮の彼、それはX氏である。

米國の國際間牒室終

昭和六年九月二十日印刷
昭和六年九月廿五日發行

定價金五拾錢

不許複製
米國の國際間牒室

著者 高村源雄
東京市下谷區御徒町一ノ一二番地

發行者 鈴木吉平
東京市淺草區南元町廿六番地

印刷者 小宮定吉
東京市淺草區南元町二十六番地

印刷所 泰光堂印刷部

發行所

泰光堂書店

東京市下谷區御徒町一ノ一二番地

(授替東京六〇一六四番)

(出版目錄進呈)

(呈進録目版出)

東京・廣島高等師範教授の推薦賞著名者出づ

廣島高等師範教授 理學博士 佐藤充生監修

理學士 加納八郎・秋間保郎 共著

最新科學による機械模型の權威!!
行詰れる日本を打開する道は青少年をして發明あるのみ!!
發明の第一歩は模型から初まる!!

少年技師模型の國全集

- 第一卷 最新模型飛行機の作り方
- 第二卷 最新電氣玩具の作り方
- 第三卷 最新ラヂオ受信機とテレグキの作り方
- 第四卷 最新科學玩具の作り方
- 第五卷 最新飛行ブライダーの作り方

以下續々發行

右各冊どれも詳細なる設計圖や鮮明な寫眞版を豊富に圖示して一讀誰れにも製作出来るやうに述べられた良書である本書を手にして良き技師たる可く直に諸君の研究を望む

泰光堂

發行所 東京東區下谷御徒町一ノ二番

定價各十七錢 送料各六錢

◇ 評番の犯罪科學讀物 ◇

岩永清一郎著

四六版二五六頁 洋綴極美本

定價金六十錢 送料六錢

趣味の犯罪科學 阿片窟の令嬢

これは絢爛たる花籠だ! 何者か黒マスクの男から贈られた。魔藥が匂ふ花束だ! 華やかな五彩の照明の中に活躍する。あの濃艶な舞姫だ!

見よ! しばし來りてその匂ひを嗅ぎその色を見、その肌に觸れて君が理性をしびらせ、君が疲れし肉體をしばし獵奇殿の供待所にねむらせて君がもの倦みたる官能に歡喜に法悦を波打たさしめ給へ!

岩永清一郎著

四六版二五六頁 洋綴極美本

定價金六十錢 送料六錢

獵奇史 日米を股にかけける女

最新刊・大好評・注文殺到!!

文學士 佐々木金之助先生 共編
文學士 山本春雄先生
*ケツト形三八〇頁上質紙
總クロース金文字入美本
定價金八十錢 (送料六錢)

最新
いろいろは辭典

本書の特色として

- 第一の特色……上等印刷紙にして印刷鮮明、製本堅牢優雅なる事
- 第二の特色……努めて新語である熟語を以つて解釋を附したる事
- 第三の特色……類字便覽、読み誤り易き漢字、國語假名ずかい、新舊對照假名ずかい等の悉く網羅した事

白熱的好評！ 注文殺到！！

最新刊 四六版三〇〇頁 函入極美本 特價五十錢 (送料六錢)

模範 現代の書簡文

驚く可き大特價！ 暴風の如き賣行！
本書を手に入ればどんな手紙でもスラ〜〜書ける良書



